

異文化適応力の規定要因に関する研究

－外向性と滞在中の対人行動の重要性－

指導教員名： 西村 孝史

氏名 : 佐原 直樹

枚数 : 24 枚

異文化適応力の規定要因に関する研究

－外向性と滞在中の対人行動の重要性－

佐原 直樹

キーワード：異文化適応 ICAPS 外向性 対人行動 留学

要約

本研究では Black, Mendenhall and Oddou (1991)の異文化適応モデルを参考に、いくつかの要素を除外し、パーソナリティ要素である外向性を加えることで普遍的な異文化適応を網羅するモデルを構築した。更に、海外滞在中の行動と異文化適応力を関連させた研究が少ないことから、本研究では滞在中の行動に焦点をあてた。分析の結果、以下の点が明らかになった。①パーソナリティ要素である外向性が異文化適応力に強く影響している点、②滞在中に外国人との接触頻度が高く、日本人との接触頻度が少ないと異文化適応力が高まる点、③滞在中のいくつかの行動と異文化適応力は相関関係があり、特に互いの意見を交換するコミュニケーションと意思決定を含む行動が異文化適応力に強い影響がある点である。本研究の最大の貢献は、企業の従業員や留学生に偏らない、一般的な異文化適応モデルを構築した点と滞在中の行動と異文化適応力の関係を明らかにした点である。

目次

I. 問題意識

II. 既存研究

1. 異文化適応の定義
2. 適応の分類
3. 異文化適応モデル
4. パーソナリティと異文化適応に関する研究
5. 滞在中の行動に関する研究
6. 異文化適応力

III. 仮説の導出

IV. 調査方法

1. 調査概要
2. 尺度構成

V. 分析結果

1. 回答者の属性
2. 天井効果・床効果
3. グループ間の平均比較
4. 相関分析
5. 重回帰分析
6. 仮説の検証

VI. 考察

1. パーソナリティについて
2. 派遣前の要因について
3. 派遣中の要因について
4. 自尊心度・自己受容度（人格要素）
5. 曖昧なことに対する忍耐度（感情規制要素）
6. 批判的な考え方と創造性（批判的思考要素）
7. 開放性と柔軟性（オープンネス要素）

VII. インプリケーション

1. 研究面のインプリケーション
2. 実務面のインプリケーション
3. 本研究の限界

I. 問題意識

2013 年 10 月、文部科学省はグローバル人材の育成を目的とした留学促進キャンペーン「トビタテ！留学 JAPAN」を開始した。文部科学省によれば、日本政府は 2020 年までに大学生の海外留学者数を現在の 6 万人から 12 万人へ倍増させる計画であり、今後ますます日本から海外への留学者数が増加することが見込まれる。

しかし、留学者数の増加の一方、留学先での様々な諸問題の発生が懸念される。その中の 1 つが異文化不適應の問題である。高濱・田中(2009)によると「Takahama, Nishimura and Tanaka(2008)は、アメリカに短期留学をした日本人学生を対象とした研究であり、適応度合いによってアンケート回答者の中に留学を楽しむことができたグループと留学をつらく感じてしまったグループの 2 つのタイプを見いだした。」と述べており、異文化不適應が留學生活の充実度、満足度に大きな影響を与えることが指摘されている。筆者自身も大学で長期の交換留学を経験しており、現地の文化や人間関係への適応力が留學生活を大きく左右することを実感していた。更に、同じ出身大学で、同じ選考過程を経て、同じ留学プログラムで派遣されている学生同士にも関わらず、適応力に顕著な違いが見受けられることもあった。そこで異文化適応力はどのような要素に影響を受けるのかということに関心を抱いた。

教育分野で留学への注目が高まる中、企業においても海外への関心が高まっており、海外進出する日系企業が増加し続けている。外務省の「海外在留邦人数統計」によれば、平成 26 年 10 月 1 日時点で日本国外へ進出している日系企業数（拠点数）は、6 万 8,573 拠点で、平成 17 年以降最多を記録している。また日系企業の海外進出に伴い、海外派遣者数も増加の一途をたどっており、平成 27 年 10 月 1 日時点における全世界の民間企業邦人数は約 45.9 万人に達している（外務省，2014）。またその数は今後も更に増加することが予想される。

こうした日系企業の海外進出、海外派遣者の増加に伴い、企業においても国際人的資源管理に関する様々な問題が生じるようになった。その諸問題の 1 つが海外派遣者の早期帰任である。海外派遣者に関する研究が盛んである米国では海外派遣者の早期帰任がかねてから問題視されてきた。Black, Mendenhall and Oddou(1991)によると、任期終了前の帰国や解任の発生率は 16～40%に達するという。海外派遣者が早期帰任してしまう場合、派遣者の移住費や給与などの派遣に伴って発生した経済的損失だけでなく、派遣元企業の評判の低下や現地従業員のモラル低下等の非経済的損失も含め、派遣元企業は大きな損失を被ることとなる。このように企業にとって大きな損失となってしまう海外派遣者の早期帰任の原因の多く

は、海外派遣者の異文化不適應である指摘されている(永井, 1999)。そのため近年では企業においても海外派遣者の異文化適應力に関心が集まっている。

このように教育現場と企業の双方で海外へ赴く人々が増加しており、海外生活で生じる諸問題の解決の必要性が高まっている。そこでそれらの問題の大きな原因となっている異文化不適應を解消する異文化適應力の規定要因を解明することができれば、教育現場における学生だけでなく企業の海外派遣者も抱える問題を解決できることが予想される。

上記の問題意識を踏まえ、本研究では2週間以上の海外滞在経験のある学生や社会人に対して質問紙調査を行い、異文化適應力に影響を与える要素を明らかにすることを試みた。また分析結果から異文化適應力を強化する方策と課題を研究面と実務面から提言する。

II. 既存研究

1. 異文化適應の定義

グローバル化が進み、異文化を持つ人々と関わる機会が増加してきたことに伴い、異文化への適應に関する研究も盛んにされてきた。異文化適應は社会学、心理学、文化人類学、医学などの諸分野において研究されてきた学術的な研究テーマであり、その定義は多岐に渡る(永井, 1999)。そこでまず、本稿における異文化適應の位置づけを先行研究に基づいて明らかにする。

Black(1990)によると、異文化適應は「適應度合いの測定の客観性」と「適應次元」の2つの観点から定義づけすることができる。まず1つ目の「適應度合いの測定の客観性」とは、海外派遣者がどれだけ異文化に適應できているのかを個人の主観に基づいて判断する「主観的判断」と仕事の業績や満足度等の客観的変数に基づいて判断する「客観的判断」の2つがある。続いて2つ目の「適應次元」とは、適應を一元化し単次元で判断する「単次元」と職務や対人関係などを考慮し複合的次元で判断する「複合的次元」がある。

本稿は留学だけでなく海外派遣労働者にも応用できる異文化適應力を測定するため、「適應度合いの測定の客観性」においては「客観的判断」を用いる。なぜなら主観的判断は、滞在目的によって著しい違いが生まれてしまうと予想されるからである。また「適應次元」については、留学や職務では現地の環境や対人関係、勉学や職務など多次元的な適應が求められることから「複合的次元」を用いる。

2. 適應の分類

Black(1990)は、異文化適應を1) 一般適應、2) 職務適應、3) 対人適應の3つに分類している。1) 一般適應とは生活全般に関する適應、2) 職務適應とは派遣地における職務に関する適應、3) 対人適應とは現地の人々との関係に関する適應である。

また Tompenaars and Charles(1997)は、異文化適應の際に生じる問題を1) 人間関係、2) 時間に対する態度、3) 環境に対する態度の3つに分類している。1) 人間関係においては、更に、それぞれの文化によって5つの相反する価値観(普遍主義: 個別主義、個人主義: 共同体主義、感情中立主義: 感情表出主義、関与特定の: 関与拡散的、達成型地位: 属性型地位)が存在する(平田, 2014)。2) 時間に対する態度とは、時間に対する価値観の違いから生まれるものである。例えば、ある文化圏では過去の業績が重要視される一方で、別の文化圏では将来への計画が重要とされる。3) 環境に対する態度とは、環境に影響を与えるものへの考え方の違いから生まれるものである。ある文化では、人が環境に影響をコントロールできると考えており(内的コントロール)、別の文化では、自然は人の力ではどうすることもできないものとして考えている(外的コントロール)。

本稿では、大学における留学生だけでなく、一般企業の海外派遣者にも共通する異文化適応力を調査するため、学生と会社員で著しく異なる 2) 職務適応を除外した。また Tompenaars and Charles(1997)の異文化適応問題の分類より、様々な価値観が存在することで問題が顕在化しやすい人間関係の問題が最も重要であると考え、その問題の解決となる 3) 対人適応を本研究で扱う。

3. 異文化適応モデル

Black, Mendenhall and Oddou (1991)は、異文化適応に関する過去の研究をまとめ、異文化適応の包括モデルを構築した(図 II-1)。このモデルは、異文化適応に影響を与える要素を派遣前と派遣中の 2 つに分類し、更なる中で、派遣前においては①事前の海外経験、②異文化適応訓練、③派遣者選抜のメカニズムおよび基準、派遣中においては④個人要素、⑤非職務要因の 5 つの規定要因を抽出している。

まず、①事前の海外経験に関しては、Black(1990)が在米日系企業の従業員において派遣前の現地の知識や情報量の多さが異文化適応を促進させていることを指摘していることから、事前の海外経験が異文化適応力に影響を与えるとと言える。また永井(1999)では、「Black(1988)は過去の海外経験が職務適応には有意な影響を与えるが、一般適応にはそれほどの影響はないとしている。」とあるが、過去の海外経験は少なからず異文化適応の促進要因になると考察している。

②異文化適応訓練に関しては、多くの研究で語学研修の重要性が述べられており、実際、海外進出している多くの日系企業では語学研修が行われている。しかし語学以外の事前研修は極端に少なく、語学以外の異文化マネジメントに関する研修等の必要性があると指摘されている(永井, 1999)。

③派遣者選抜のメカニズムおよび基準に関しては、多くの企業で職務能力が海外派遣者の選抜において重要視されている。しかし、近年では、海外派遣者が現地に適応することを考慮し、派遣者の職務能力だけでなく異文化適応力やコミュニケーション能力も重視するべきであるという指摘がある(永井, 1999)。

派遣中の要因である④個人要素と⑤非職務的要素には、それぞれ下位概念がある。④個人要素は自己効力感、対人関係能力、認知能力の 3 つ、⑤非職務的要素にも家族適応と文化的新奇性の 2 つの下位概念である(Black, Mendenhall and Oddou, 1991)。海外派遣者の家族の異文化不適應は、派遣者の早期帰任の一因であると指摘されている(永井, 1999)。このため派遣者の家族の適応度は、派遣者本人の異文化適応にも重大な影響を及ぼすと考えられている。また文化新奇性とは、派遣者自身の文化と現地の文化との文化的乖離度のことである。永井(1999)は、世界 47 ヶ国を 7 地域(北米、オセアニア、欧州、アジア、中南米、アフリカ、中近東)に分類し、異文化適応促進要因の地域間比較からさらに高促進地域(北米、オセアニア)、中促進地域(欧州、アジア、中南米)、低促進地域(アフリカ、中近東)の 3 つに分類し、高促進地域ほど、異文化適応が容易であると述べている。

本研究では、この異文化適応モデルを基に分析枠組みを構築する。しかし、③派遣者選抜のメカニズムおよび基準、④個人要因の自己効力感、認知能力、⑤非職務要因の家族適応は考慮しない。これらの要素を除外する理由は、まず③派遣者選抜のメカニズムおよび基準は、企業と大学における海外派遣者の選抜基準には明確な違いがあることに加え、正規留学や語学留学等は選考が伴わないものも多いからである。また④個人要因の自己効力感、認知能力は、個人要因の中でもより 1 つの要素に関して詳しく分析を試みたため、留学や仕事でも必要とされる対人関係能力に限定した。⑤非職務要因の家族適応は、多くの学生が単身で海外に滞在することが多いため家族適応は本研究では除外した。また①過去の海外経験に関しては、先行研究に対人適応に関する記述がなかったため、本研究では過去の経験が対人適応力にどのような影響を与えるかを分析する。また②事前研修に関しても、研修の内容の違いによる異文化適応力への影響の違いまで研究されていないため、研修内容の違いが対人適応にどのような影響を与えているのかを検証

4. パーソナリティと異文化適応に関する研究

異文化適応に関する研究は数多くなされているものの、個人のパーソナリティと異文化適応に関する研究は少ない(樋口, 1997)。またパーソナリティと異文化適応に関する研究の1つである、孫(2011)でも、在日中国人学生を対象にTCIを尺度として用いることでパーソナリティが留学によって変化するかどうかを研究しているが、パーソナリティが異文化適応力に与える影響を研究したものではない。

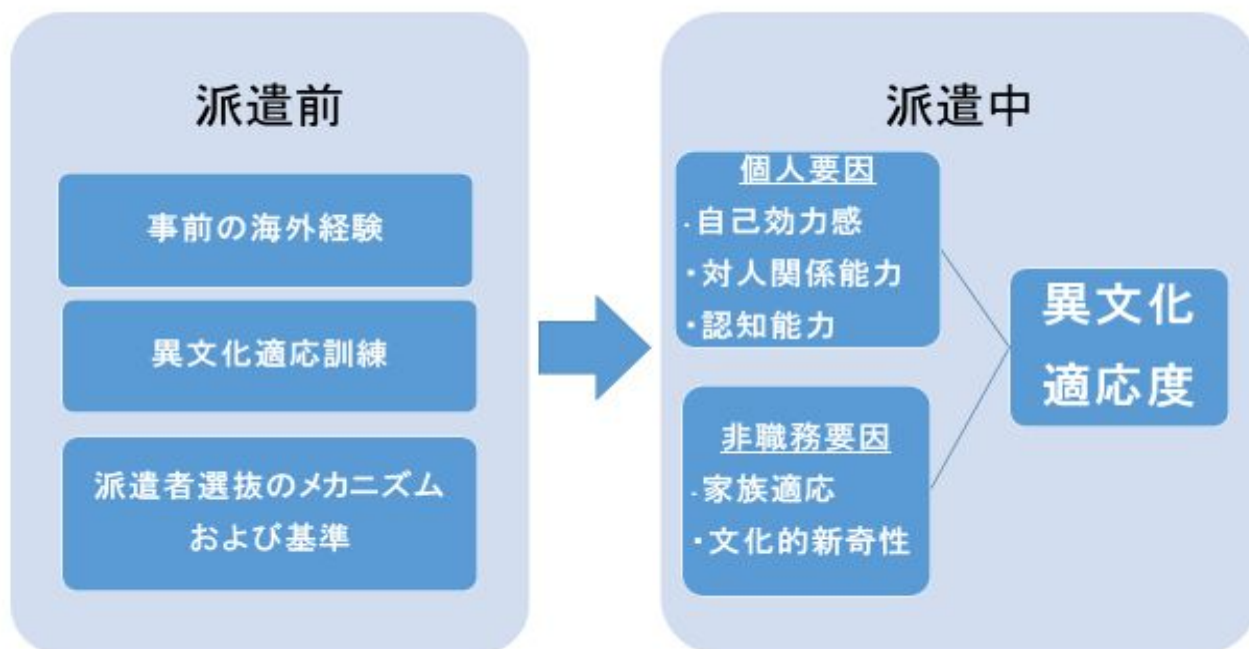
しかし、茂住(2004)は外向的な人はコミュニケーションがより円滑に進むことを指摘しており、外向性が異文化適応力、特に対人適応に影響があるのではないかと考えた。そこで本稿ではこの外向性が異文化適応力へ及ぼす影響も検討する。

5. 滞在中の行動に関する研究

平田(2014)は、既存の異文化適応に関する研究をまとめ、異文化適応能力とは何かを明らかにした研究である。この研究をはじめ、異文化適応に関する様々な先行研究においては、異文化適応が高いとされる人の要素を抽出すること、派遣前後における異文化適応や海外派遣者への影響を示唆したものは数多くあるものの、滞在中の行動と異文化適応力を関連付けた研究は極端に少ない。

そこで本稿では、滞在中の行動と異文化適応力との関係性に着目する。しかし、滞在中の行動全体を網羅するには範囲が広すぎるため、滞在中の行動の中でも対人関係に関する行動に限定した。滞在中の対人行動に関する先行研究は見当たらなかったため、本研究の質問紙における滞在中の対人関係に関する行動の設問は筆者自身が作成した。

図Ⅱ-1 異文化適応の促進要因モデル



Black, Mendenhall and Oddou (1991)を基に作成

6. 異文化適応力

異文化適応力を測定する代表的な手法として、サンフランシスコ大学のデーヴィッド・マツモト氏が考案した国際適応力テスト=Intercultural Adjustment Potential Scale(以下、ICAPS)がある。ICAPSは、米国に長期滞在している日本人を中心とした2000名から得たデータも基に作成されている。ICAPSには、55の質問項目で15の心理要素を測定するICAPS-55と、26の質問項目で4つの主要心理要素を測定し、異文化適応力に深く影響があるとされているICAPS-26がある。ICAPS-26の4つの主要要素とは「自尊心度・自己受容度(人格要素)」、「曖昧なことに対する忍耐度(感情規制要素)」、「批判的な考え方や創造性(批判的思考要素)」、「開放性と柔軟性(オープンネス要素)」である。

「自尊心度・自己受容度(人格要素)」とは、自尊心・自意識・自信があり、自分に満足している度合いである。この要素は4要素の中で最も重要であり、他の3要素に正の影響を与える。自尊心があることで異文化の生活において困難に直面した際、その困難を乗り越えることができる。

「曖昧なことに対する忍耐度(感情規制要素)」とは、文化の違いから生じる様々な問題に対して、まずは自分の感情をコントロールし、何が起きているかわからない曖昧な状況に耐える度合いである。異文化圏では、自分の文化圏では考えられないことが生じることが多々あり、そのような事態に冷静に対応することが必要不可欠である。

「批判的な考え方や創造性(批判的思考要素)」とは、物事の本質や問題の原因を論理的に考え、1つの事象に対して多面的に捉える能力である。1つの文化圏で長く生活していると、その社会における常識に囚われてしまい、物事を正確に捉えることができないことがある。国際社会では、そのような常識や慣習に囚われず、物事を論理的に考えることが求められる。

「開放性と柔軟性(オープンネス要素)」とは、自分の考えをさらけ出して公正に評価し(開放性)、自分とは異なる考えや価値観を受け入れる(柔軟性)能力である。つまり「開放性と柔軟性」とは、主に文化の違いから生じる衝突を解決する能力である。異なる文化・価値観を持つ人々との共同作業では、お互いの考えが異なる状況において1つの結論を出さなくてはならない場合がある。その際に、開放性と柔軟性を持ち合わせていれば、自分の意見を客観的に判断し、相手の主張を受け入れた上で、互いに納得することができる結論を出すことが可能である。

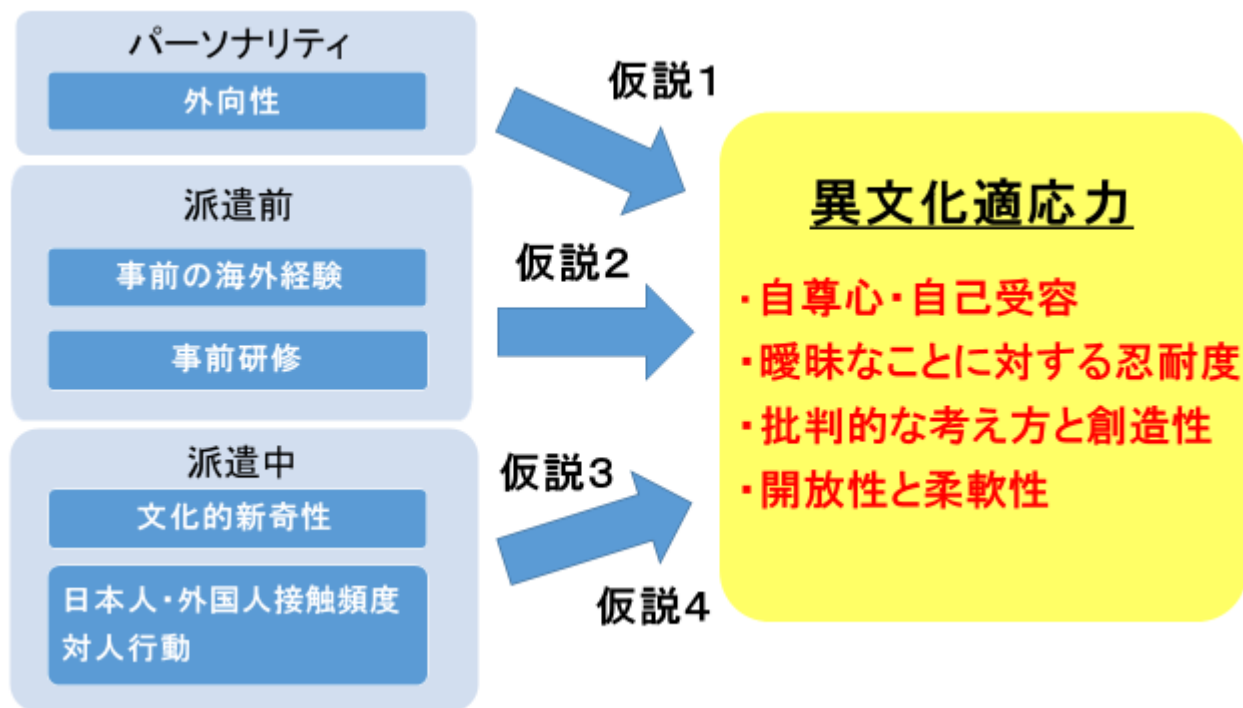
なお、明石(2007, 2008)、武内・岡田・平山・マツモト(2004)等、このICAPSを用いて異文化適応力を測定している研究はいくつもあり、ICAPSの妥当性、信頼性は確認済みである。

Ⅲ. 仮説の導出

前項で述べた既存研究を踏まえ、本稿では以下の枠組みで研究を行う。Black et al. (1991)のモデルを基に、従属変数に異文化適応力を設定し、独立変数に派遣前の要素である事前の海外経験、滞在前研修、滞在中の要素である文化的新奇性、対人関係に関する行動(外国人、日本人との接触頻度、外国人の友人としたこと)および本人のパーソナリティである外向性も独立変数として用いた。

異文化適応力は、その下位概念である4つの主要要素:「自尊心度・自己受容度(人格要素)」、「曖昧なことに対する忍耐度(感情規制要素)」、「批判的な考え方や創造性(批判的思考要素)」、「開放性と柔軟性(オープンネス要素)」を使用する(図Ⅲ-1)。この枠組みを基に以下の仮説を導出した。

図Ⅲ-1 分析の枠組み



平田(2014)より、「茂住(2004)は、外向的な人は内向的な人よりもコミュニケーションがより円滑に進むことを指摘している」。つまり外向性の高い人は一般的に人と接することが得意であると言える。コミュニケーションが得意な人は、苦手な人に比べると自分自身をさらけ出すことに抵抗が少なく、「自尊心度・自己受容度（人格要素）」が高いことが予想される。また積極的なコミュニケーションによって価値観の違う人との考えの不一致を解消し易いと予想できるため、異なることへの柔軟性も高いと考え、仮説 1a、1b を導出した。

仮説 1a：外向性が高い人ほど、「自尊心度・自己受容度（人格要素）」が高い

仮説 1b：外向性が高い人ほど、「開放性と柔軟性（オープンネス要素）」が高い

Black et al. (1990)の適応モデルにおいて「過去の海外経験」の豊富さは異文化適応力に影響を与えている。海外での生活経験が豊富なほど、異文化での生活やカルチャーショックにも慣れており、異文化適応力が高まると言える。また異文化での生活では自分の予想できないことが日常的に起き、その経験から予期しないことへの忍耐力は高まると予想される。そこで海外経験が豊富な人は、異文化適応力の中でも特に「曖昧なことに対する忍耐度（感情規制要素）」が、海外経験が少ない人に比べて高いと考えられるため、仮説 2a を導出した。

仮説 2a：海外経験が豊富なほど、「曖昧なことに対する忍耐度（感情規制要素度）」が高い

仮説 2a と同様に Black et al. (1990)より、「異文化適応訓練」も異文化適応力に影響を与えている。派遣前の事前研修で外国語を学んだり予め異文化に触れたりしておくことで海外での生活に対する不安が軽減され、海外生活に対する自信が高まると考えられる。そのため、事前研修を受けた人は異文化適応力の

中でも「自尊心度・自己受容度（人格要素）」が高いと予想され、仮説 2b-1 を導出した。また研修内容に関しては、語学のみよりも異文化コミュニケーションや滞在先の文化を同時に学ぶことの相乗効果により、自分の国の文化では考えられないような環境や人々の行動に対して論理的に思考することができる。そこで語学と共に異文化に関する研修を受けた人はそうでない人に比べて「批判的な考え方と創造性（批判的思考要素）」が高いと考えられるため、仮説 2b-2 を導出した。

仮説 2b-1：事前研修を受けた人は、そうでない人に比べて「自尊心度・自己受容度（人格要素）」が高い
仮説 2b-2：語学研修よりも異文化コミュニケーションや滞在先の文化に関する研修を受けた人ほど、「批判的な考え方と創造性（批判的思考要素）」が高い

更に、Black et al. (1990)の適応モデルより、地域新奇性、つまり現地の文化と自分の文化との乖離度が派遣者の異文化適応力に影響を与えている。永井(1999)によると、日本との文化的距離（文化的乖離度）が小さいほど、異文化適応が促進されると述べている。したがって、適応が比較的難しい日本との文化的距離が遠い地域に滞在していた人は異文化適応力が高いと考えられる。文化的乖離度が大きいということは、滞在中に受けるカルチャーショックも大きいと考えられるため、異文化適応力の中でも特に「曖昧なことに対する忍耐度（感情規制要素度）」に正の影響を与えるだろうと予想され、仮説 3a を導出した。

同様に、文化的新奇性の高い地域出身の友人と多くの時間を過ごしていた人も異文化適応力が高いと考えられる。そこで異文化を持った人との対人関係で特に必要とされる「開放性と柔軟性（オープンネス要素）」が高いと予想し、仮説 3b を導出した。

仮説 3a：地域新奇性が高い（文化的乖離度が大きい）地域に滞在した人は、そうでない人に比べて、「曖昧なことに対する忍耐度（感情規制要素度）」が高い
仮説 3b：地域新奇性の高い地域の友人と一緒に過ごす時間が長かった人は、そうでない人に比べて、「開放性と柔軟性（オープンネス要素）」が高い

最後に、滞在中における行動と異文化適応力の関係を明らかにするため、仮説 4a-1、4a-2、4b を導出した。花木・塩澤(2007)は、留学中に日本人同士で固まってしまう学生の英語力、異文化適応力への影響を指摘しており、このことから滞在中の外国人との接触頻度が多ければ異文化適応力は高まり、日本人との接触頻度が多ければ異文化適応力は高まらないと予想される。

仮説 4a-1：外国人との接触頻度は異文化適応力（4 要素）に正の影響を及ぼす
仮説 4a-2：日本人との接触頻度は異文化適応力（4 要素）に負の影響を及ぼす

仮説 4b：より密接に外国人と関わる行動をした人ほど、異文化適応力（4 要素）が高い

IV. 調査方法

1. 調査概要

本研究の質問紙調査の対象者は、2 週間以上の海外滞在経験のある学生や社会人である。留学だけでなく、様々な滞在目的において普遍的な異文化適応力を調査するため、年齢や職業、所属大学等は限定しなかった。調査期間は 2015 年 11 月 24 日～11 月 27 日で、紙媒体の質問紙と電子媒体の Google Form の 2 種類を用いて質問紙調査を実施した。

2. 尺度構成

2-1. 異文化適応力

本稿では、様々な国や地域での滞在経験を持つ人を研究対象としているため、1 つの国や地域に対する適応度合いではなく、普遍的な異文化に対する適応力を測定できる尺度である ICAPS-26 を用いた。マツモト(1999)に記載してある 26 の質問項目(図IV-1)を使用し、それぞれの項目に対して「1. 全くそう思わない」～「7. 非常にそう思う」の 7 点尺度で回答してもらった。それらの回答をマツモト(1999)で記述されている計算式(図IV-2)を用いて、異文化適応力の主要 4 要素を算出した。各要素で適応力が高いとされる基準が異なるため、平均化などはせずマツモト(1999)と同様の計算式を使用した。しかし、ICAPS-26 の構造上、「自尊心度・自己受容度(人格要素)」、「曖昧なことに対する忍耐度(感情規制要素)」の 2 つは、値が低いほど度合いが高まる逆転項目であったため、分析の際には、この 2 項目の計算後の値を逆転処理をして使用した。

2-2. 英語力

異文化適応力には言語能力も深い関わりがあると考え、アンケート回答者の英語能力も調査した。英語力の尺度は、「1. いくつかの単語以外は全く理解していなかった」、「2. ある程度の単語や短い決まり文句は理解していた」、「3. おおまかな意味は理解していた」、「4. おおむね理解していた」、「5. 言語を完全に理解していた」の 5 つの選択肢の中から自分の英語力に最も当てはまるものを回答してもらった。

2-3. 外向性

外向性の尺度としては、Big Five の要素を 10 項目で測定する Ten Item Personality Inventory(TIPI)を日本語用に作成し直した小塩・阿部・カトローニ(2012)を参考とし項目を作成した。小塩・阿部・カトローニ(2012)で使用されている 10 項目の中の外向性に関わる 2 項目「私は活発で、外向的だと思う」、「私はひかえめでおとなしいと思う」を使用し、「1. 全くそう思わない」～「7. 非常にそう思う」の 7 点尺度で回答してもらった。また「私はひかえめでおとなしいと思う」は逆転項目であるため、分析の際には逆転処理をして分析を行った。

2-4. 事前の海外経験

海外経験の「豊富さ」は、海外での滞在回数や滞在期間など様々な観点から言い表すことができるため、本稿においてはこの海外経験の「豊富さ」を測るために以下の 5 つの変数を用いた。

- ①海外の滞在総数(海外へ渡航した数の多さ)
- ②今まで海外で過ごした合計期間(海外生活の長さ)
- ③海外で過ごした合計時間を本人の年齢で割った海外生活比率(海外生活の割合)

④1 回の滞在における最長滞在期間（1 度の滞在の長さ）

⑤帰国子女であるかどうか（幼少期に海外で生活していたかどうか）

2-5. 事前研修

事前研修に関して、事前研修の有無を問う質問項目と事前研修の内容を問う質問項目を設けた。研修内容は、「1. 語学」、「2. 異文化コミュニケーション」、「3. 滞在先の文化」、「4. 危機管理」、「5. ストレスマネジメント」、「6. その他」の 6 つの選択肢から受講した研修内容をすべて選択してもらった。

2-6. 文化的新奇性

文化的新奇性は、最も滞在期間の長かった地域とその滞在中、一緒に過ごす時間が長かった 3 人の外国人の友人の出身地域を、永井(1999)が分類した 7 地域（北米、オセアニア、欧州、アジア、中南米、アフリカ、中近東）の中からそれぞれ選択してもらった。同様に永井(1999)より、7 地域を高促進地域（北米、オセアニア）、中促進地域（欧州、アジア、中南米）、低促進地域（アフリカ、中近東）の 3 つに分類し、高促進地域が最も文化的新奇性が低く（異文化適応しやすい）、低促進地域が最も文化的新奇性が高い（異文化適応しにくい）とした。

2-7. 接触頻度

滞在中の外国人と日本人との接触頻度は、外国人と日本人それぞれと会ってコミュニケーションをとる頻度、連絡をとる頻度、同居している外国人と日本人の人数の計 6 項目を用いた。コミュニケーションをとっていた頻度と連絡頻度の質問には、「1. 全くコミュニケーションをとらなかった」、「2. 月に 1 回以下」、「3. 月に 3~2 回」、「4. 週 3~1 回月に 3~2 回」、「5. 週に 6~4 回」、「6. 毎日」の 6 つの選択肢から最も当てはまるものを回答してもらった。外国人と日本人の同居者数は、滞在中最も長く住んでいた住居の同居者数を回答してもらった。

2-8. 滞在中に外国人の友人としたこと

滞在中に外国人の友人と一緒にしたことは、「1. 食事をする」、「2. お酒を飲む」、「3. イベントに参加する」、「4. 趣味の集まりに参加する」、「5. スポーツをする」、「6. ボランティア活動に参加する」、「7. 旅行をする」、「8. 共同生活をする」、「9. その他」の 9 項目からしたことがあるものすべてを回答してもらった。

図IV-1 ICAPS-26 の質問項目及び計算式

1	自分の夫や妻（または恋人）に異性の友人がいても構わない
2	自分が正しいと確信していれば、あまり他人の議論を聞くことに時間を浪費しない
3	（感情的に）緊迫した状況におちいると不安になる
4	心配したり、怖いと思ったりしたことがめったにない
5	うまくいかないかもしれないと、よく心配する
6	いつも他人よりも劣っていると感じている
7	上司がそばにいと落ち着かない
8	一般市民は政府の決定に影響を与えることができる
9	バレエやモダンダンスの公演を見るのは退屈だ
10	「俳句」が好きだ
11	香りは昔の思い出を呼び覚ます
12	私は頑固だ
13	他人のやることを気にするべきではない
14	休暇の予定を立てるのが好きではない
15	ふだん幸せだと感じる
16	すぐ怒る
17	あまり興奮することがない
18	自分は古風だと思う
19	現代の子どもたちの問題は、親が子どもを十分に罰さない点にある
20	移民のために、この国（自分の住んでいる国）は破滅しつつある
21	詩を書いてみたことがある
22	頭のよい人には、気持ちが落ち着かない
23	自分の体に満足している
24	宇宙の起源について考えるのが好きだ
25	性教育を行うことはよいことだ
26	女性も男性と同じように性的自由を持つべきだ

自尊心度・自己受容度（人格要素）

$$= (\text{No. } 3 + \text{No. } 5 + \text{No. } 6 + \text{No. } 7 + \text{No. } 11 + \text{No. } 22) - (\text{No. } 4 + \text{No. } 8 + \text{No. } 15 + \text{No. } 23)$$

曖昧なことに対する忍耐度（感情規制要素）

$$= (\text{No. } 2 + \text{No. } 12 + \text{No. } 16 + \text{No. } 18) - (\text{No. } 8 + \text{No. } 14 + \text{No. } 17 + \text{No. } 24)$$

批判的な考え方と創造性（批判的思考要素）

$$= (\text{No. } 10 + \text{No. } 11 + \text{No. } 13 + \text{No. } 21 + \text{No. } 24) - (\text{No. } 4 + \text{No. } 9 + \text{No. } 17 + \text{No. } 19)$$

開放性と柔軟性（オープンネス要素）

$$= (\text{No. } 1 + \text{No. } 25 + \text{No. } 26) - (\text{No. } 9 + \text{No. } 20)$$

出典：マツモト・デーヴィット(1999)『日本人の国際適応力：新世紀を生き抜く四つの指針』

V. 分析結果

1. 回答者の属性

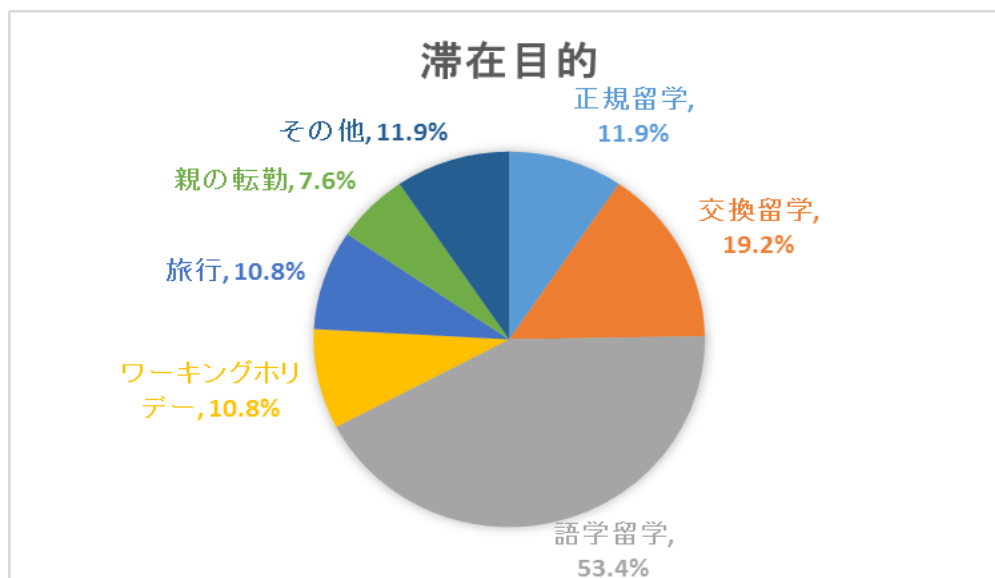
質問紙調査の有効回答数は 116(女性 57 名、男性 59 名)であり、回答者の年齢は 18 歳～55 歳であった。図表 V-1 は回答者の性別と職業のクロス集計図表である。男女比はほぼ 1 : 1 であり、社会人と学生の比率はほぼ 3 : 7 である。アンケート回答者の滞在目的は、正規留学(11 名)、交換留学(19 名)、語学留学(53 名)、ワーキングホリデー (10 名)、旅行 (10 名)、親の転勤 (7 名) であった (図 V-2)。

またアンケート回答者の異文化適応力 (自尊心度・自己受容度、曖昧なことに対する忍耐度、批判的な考え方と創造性、開放性と柔軟性) の平均とマツモト(1999)に記載されている日本人平均を比較したものが図 V-3 である。「自尊心度・自己受容度」、「曖昧なことに対する忍耐度」は値が低いほど、度合いが高くなるため、今回のアンケート回答者はすべての項目において平均よりもやや高い。特に自尊心度・自己受容度は、一般的な平均値よりも高い。このことから、本研究のアンケート回答者たちは概ね異文化適応力が高かったと言える。

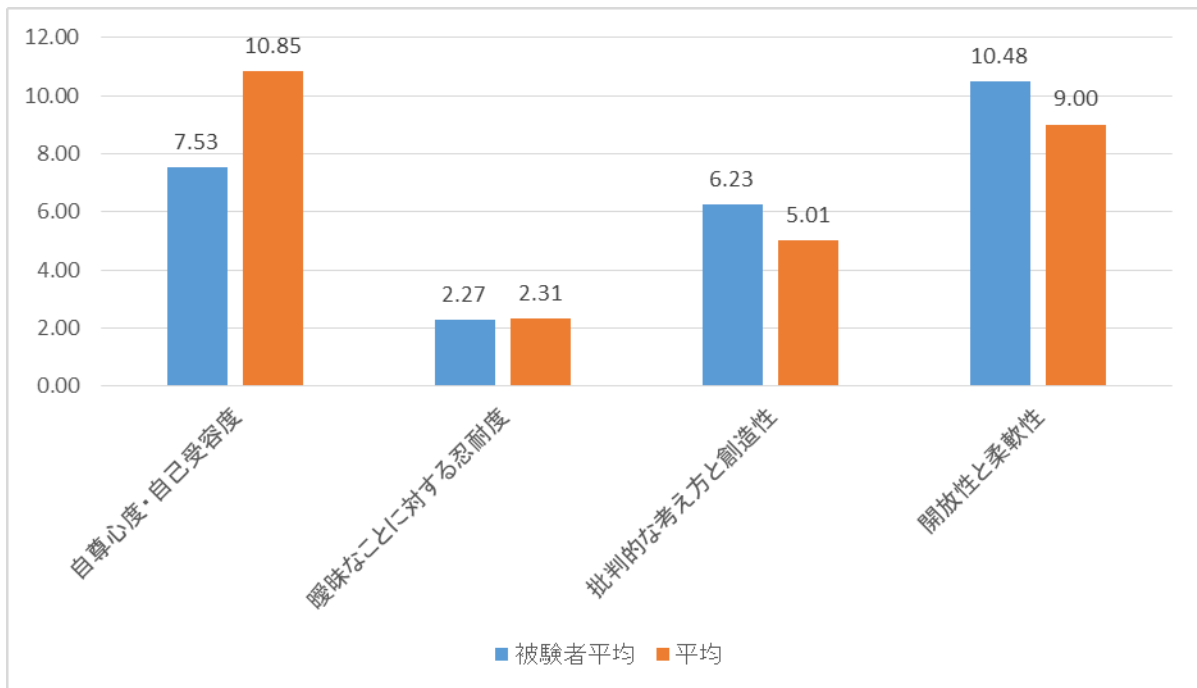
図表 V-1 性別と職業のクロス集計図表

		職業		合計
		社会人	学生	
性別	女性	18.1%	31.0%	49.1%
	男性	13.0%	37.9%	50.9%
合計		31.1%	68.9%	100%

図 V-2 滞在目的



図V-3 アンケート回答者 ICAPS の平均点と日本人平均の比較



2. 天井効果・床効果

独立変数の記述統計をとり、それぞれ天井効果・床効果の有無を確認した。その結果、「外国人との接触頻度」、「日本人との接触頻度」の2項目で天井効果が確認されたため、この2項目に関しては分析結果から除外する。

3. グループ間の平均比較

異文化適応力の4要素それぞれの平均値を「性別」、「職業（学生：社会人）」のグループごとに比較した結果が図V-4である。分析の結果、性別ごとの比較では、「曖昧なことに対する忍耐度」と「批判的な考え方と創造性」の2項目で統計的に有意な差が見られた。男性は女性よりも「曖昧なことに対する忍耐度」が2.89高かった。一方、女性は男性よりも「批判的な考え方と創造性」が3.69高かった。職業別の比較では、統計的に有意な差は見られなかったが、すべての要素で学生は社会人よりも数値が高い。

図 V-4 平均比較 (性別・職業)

		自尊心・自己受容度		曖昧なことに対する忍耐度		批判的な考え方と創造性		開放性と柔軟性	
性別	N	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
女性	57	-8.63	7.42	-3.74	4.88	8.11	6.70	10.9	4.02
男性	59	-6.46	7.96	-0.85	4.08	4.42	6.83	10.0	3.28
T値		-1.52		-3.46***		2.92***		1.39	
職業	N								
学生	80	-6.78	8.03	-1.95	4.70	6.24	7.46	10.74	3.51
社会人	36	-9.19	6.88	-2.97	4.69	6.22	5.91	9.92	4.01
T値		-1.56		-1.08		-0.11		-1.13	

***. 相関係数は 1% 水準で有意。

4. 相関分析

それぞれの仮説に基づいて相関分析をした結果が図 V-5 である。

まず、「外向性」と「自尊心度・自己受容度」は、.294(p<.01)で正の相関が確認された。また、「外向性」と「開放性・柔軟性(オープンネス要素)」においても、.336(p<.01)で正の相関が確認された。その他の要素である「曖昧なことに対する忍耐度(感情抑制要素)」、「批判的な考え方と柔軟性(批判的思考要素)」においても、10%水準ではあるが、それぞれ.156(p<.10)、.177(p<.10)で正の相関関係があることが確認された。以上のことから、「外向性」は異文化適応力の4要素すべてと相関関係にあると言える。

次に、「過去の海外経験」である①海外の滞在経験総数(経験総数)、②今まで海外で過ごした合計期間(合計期間)、③海外で過ごした合計時間を本人の年齢で割った海外生活比率(海外生活比率)、④1回の滞在における最長滞在期間(最長滞在期間)の4項目に関しては、「開放性・柔軟性(オープンネス要素)」との間に相関が見られた。①海外滞在経験総数は.212(p<.05)、②海外滞在合計期間は.186(p<.05)、③海外生活比率は.205(p<.05)、④最長滞在期間は.183(p<.05)でそれぞれ正の相関が見られた。しかしその他の要素との相関関係はみられなかった。

「事前研修の有無」、「滞在地域の文化的新奇性」と「一緒に過ごす時間の長かった友人の出身地域の文化的新奇性」は、異文化適応力の4要素との相関関係は全く見られなかった。

最後に外国人と日本人の連絡頻度、滞在中の外国人友人との行動と異文化適応力の4要素を相関分析したところ、以下、相関関係が見られた。外国人と日本人との接触頻度については、「日本人との連絡頻度」が「自尊心度・自己受容度(人格要素)」と-.237(p<.05)で負の相関関係、「外国人同居者数」が「開放性・柔軟性(オープンネス要素)」と.192(p<.05)、「批判的な考え方・創造性(批判的思考要素)」と.157(p<.10)で正の相関関係にあることがわかった。また滞在中の外国人友人との行動に関しては、「ボランティア活動に参加する」、「趣味の集まりに参加する」、「スポーツをする」、「旅行をする」、「共同生活をする」の5項目において、異文化適応力要素との相関関係が見られた。まず「ボランティア活動に参加する」、「趣味の集まりに参加する」は「開放性・柔軟性(オープンネス要素)」とそれぞれ.172(p<.01)、.178(p<.01)で正の相関関係であった。「スポーツをする」は「自尊心度・自己受容度(人格要素)」と.192(p<.05)で正の相関が見られた。「旅行をする」は「自尊心度・自己受容度(人格要素)」と.200(p<.05)、「曖昧なことに対する忍耐度(感情規制要素)」と.186(p<.05)、「批判的な考え方と創造性(批判的思考要素)」と.199(p<.05)でそれぞれ正の相関関係にあることがわかった。「共同生活をする」は「開放性と柔軟性(オープンネス要素)」と.188(p<.05)の正の相関があった。

図 V-5 相関分析表

		平均値	標準偏差	自尊心度・ 自己受容度	曖昧なこと に対する忍耐度	批判的な考え方・ 創造性	開放性・ 柔軟性
仮説1a,b	外向性	4.84	1.33	.294***	.156***	.177***	.336***
仮説2a	経験総数	2.38	1.67	.038	.052	.078	.212**
	合計期間	14.91	18.67	.030	.083	-.008	.186**
	海外生活比率	5.35	6.84	.038	.063	.018	.205**
	最長滞在期間	3.32	1.77	.113	.109	-.020	.183**
仮説2b	事前研修	0.34	0.47	-.098	.096	-.089	-.019
仮説3a,b	滞在地域	1.36	0.70	.012	-.024	-.037	-.115
	友人出身地域(1)	1.78	0.56	.044	.051	.091	.043
	友人出身地域(2)	1.67	0.66	.036	-.017	.062	-.064
	友人出身地域(3)	1.64	0.69	-.002	.853	.113	.032
仮説4a	外国人連絡頻度	2.91	2.55	-.140	.007	.043	.159*
	日本人連絡頻度	4.31	1.54	-.237**	.017	.035	-.061
	外国人同居者数	2.91	2.55	.142	.139	.157***	.192**
	日本人同居者数	4.31	1.54	.115	-.090	-.015	-.011
仮説4b	食事をする	0.94	0.24	-.058	-.132	.034	.063
	飲酒をする	0.71	0.46	-.059	-.121	-.017	.131
	イベントに参加する	0.82	0.39	-.117	-.045	.131	.172*
	ボランティアに参加する	0.22	0.42	-.113	-.066	.136	.127
	スポーツをする	0.53	0.50	.192**	.105	-.041	.052
	趣味の集まりに参加する	0.42	0.50	-.047	-.030	.127	.178*
	旅行をする	0.41	0.50	.200**	.186**	.199**	.018
	共同生活をする	0.56	0.50	.061	.079	.152	.188**

*. 相関係数は 10% 水準で有意 (両側) です。

** . 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

***. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

N=116

5. 重回帰分析

各独立変数の異文化適応力の 4 要素への影響力を測るため、相関分析で統計的に有意な結果が得られた項目を独立変数、異文化適応力の 4 要素を従属変数として、重回帰分析を行った（図 V-6）。

「自尊心度・自己受容度（人格要素）」では、「性別」、「外向性」、「日本人との連絡頻度」、「旅行をする」の 4 項目で統計的に有意な結果が見られた。その中でも外向性が最も正の影響を与えており、滞在中の行動では「日本人との連絡頻度」、「旅行をする」の 2 項目が正の影響力をもっていることが明らかとなった。

「曖昧なことに対する忍耐度（感情規制要素）」では、「性別」、「外向性」の 2 項目でのみ有意な結果が見られた。特に性別が強い正の影響があり、「曖昧なことに対する忍耐度（感情規制要素）」において、男性は女性よりも優れていると言える。

「批判的な考え方と創造性（批判的思考要素）」では、「性別」、「外向性」、「外国人同居者数」、「旅行をする」、「共同生活をする」の 5 項目で有意な結果が見られた。「旅行をする」が「批判的な考え方と創造性（批判的思考要素）」に対して最も正の影響力があった。

開放性と柔軟性（オープンネス要素）では、「英語力」、「外向性」、「海外滞在の経験総数」、「海外生活比率」、「共同生活をする」の 5 項目で有意な結果が見られた。特に「外向性」の正の影響が強く見られた。

図 V-6 重回帰分析表

変数	自尊心度・自己受容度		曖昧なことに対する忍耐度		批判的な考え方と創造性		開放性と柔軟性	
	β	標準偏差	β	標準偏差	β	標準偏差	β	標準偏差
性別	.155*	1.379	.320***	.840	-.240***	1.240	-.076	.632
年齢	-.094	.141	-.057	.086	.036	.126	-.148	.064
英語力	.035	.780	-.135	.476	.103	.702	.161*	.358
外向性	.282***	.541	.208**	.330	.191**	.487	.333***	.248
経験総数	-.076	.448	-.100	.273	-.013	.403	.170*	.205
海外生活比率	-.015	.101	.052	.062	.009	.091	.156*	.046
研修有無	.088	1.494	-.100	.910	-.112	1.343	-.020	.685
外国人同居者数	.054	.280	.078	.171	.169**	.252	.114	.128
日本人連絡頻度	-.200	.466	.043	.284	.094	.419	.058	.213
旅行をする	.194**	1.432	.153	.873	.278***	1.287	-.048	.656
共同生活をする	.083**	1.489	.090	.907	.163**	1.339	.180*	.682
調整済みR2乗	0.140		0.134		0.147		0.200	
F値	2.712***		2.624***		2.805***		3.615***	

*. 相関係数は 10% 水準で有意（両側）です。
 **. 相関係数は 5% 水準で有意（両側）です。
 ***. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

N=116

6. 仮説の検証

仮説 1a: 外向性が高い人ほど、自尊心度・自己受容度（人格要素）が高い

仮説 1b: 外向性が高い人ほど、開放性と柔軟性（オープンネス要素）が高い

相関分析より「外向性」が「自尊心度・自己受容度（人格要素）」、「開放性と柔軟性（オープンネス要素）」のそれぞれに正の影響があることが示されたため、仮説 1a、1b は支持された。また、「外向性」はその他の異文化適応要素である「曖昧なことに対する忍耐度（感情規制要素）」と「批判的な考え方と創造性（批判的思考要素）」においても相関関係が確認された。重回帰分析においても、「外向性」がすべての異文化適応力要素に対して影響力が大きいと示された。

仮説 2a: 海外経験が豊富なほど、曖昧なことに対する忍耐度（感情規制要素度）が高い

相関分析により、海外経験の豊富さを測る 5 項目と「曖昧なことに対する忍耐度（感情規制要素度）」との相関はみられなかった。また重回帰分析でも統計的に有意な結果は得られなかったため、仮説 2a は棄却された。しかし、帰国子女要素以外の 4 つの項目と「開放性と柔軟性（オープンネス要素）」との間には相関が見られた。また重回帰分析の結果、特に「海外滞在の経験総数」、「海外生活比率」の 2 つが「開放性と柔軟性（オープンネス要素）」に強い影響を与えていることが判明した。

仮説 2b-1: 事前研修を受けた人は、そうでない人に比べて自尊心度・自己受容度（人格要素）が高い

仮説 2b-2: 語学研修よりも異文化コミュニケーションや滞在先の文化に関する研修を受けた人ほど、批判的な考え方と創造性（批判的思考要素）が高い

相関分析と重回帰分析を行った結果、どちらの分析においても統計的に有意な結果は得られなかったため仮説 2b、2b-1 は棄却された。

仮説 3a: 地域新奇性が高い（文化的乖離度が大きい）地域に滞在した人は、そうでない人に比べて、曖昧なことに対する忍耐度（感情規制要素度）が高い

仮説 3b: 地域新奇性の高い地域の友人と一緒に過ごす時間が長かった人は、そうでない人に比べて、開放性と柔軟性（オープンネス要素）が高い

相関分析と重回帰分析の結果、どちらの分析においても統計的に有意な結果は得られなかったため仮説 3a、3b は棄却された。また、その他の異文化適応力要素に対しても有意な結果は得られなかった。

仮説 4a-1: 外国人との接触頻度は異文化適応力（4 要素）に正の影響を及ぼす

仮説 4a-2: 日本人との接触頻度は異文化適応力（4 要素）に負の影響を及ぼす

相関分析の結果、外国人との接触頻度に関しては、「外国人同居者数」と「批判的な考え方と創造性（批判的思考要素）」、「開放性と柔軟性（オープンネス要素）」がそれぞれ正の相関関係にあることがわかった。また、日本人との接触頻度は、「日本人との連絡頻度」と「自尊心度・自己受容度（人格要素）」

が負の相関関係であることが明らかになった。重回帰分析においても「外国人同居者数」と「批判的な考え方と創造性（批判的思考要素）」には統計的に有意な結果が得られた。したがって、すべての要素ではなかったが、異文化適応力との関係が証明されたため、仮説 4a-1、4a-2 は、それぞれ一部が支持された。

仮説 4b：より密接に外国人と関わる行動をした人ほど、異文化適応力（4 要素）が高い

相関分析の結果、「スポーツをする」、「旅行をする」、「共同生活をする」の 3 項目において、異文化適応力要素との相関が見られた。「自尊心度・自己受容度（人格要素）」は、「スポーツをする」、「旅行をする」がそれぞれ正の相関、「曖昧なことに対する忍耐度（感情規規制要素）」は、「旅行をする」が正の相関、「批判的な考え方と創造性（批判的思考要素）」は、「旅行をする」と正の相関、「開放性と柔軟性（オープンネス要素）」と「共同生活をする」が正の相関関係にある。

また、重回帰分析では、「旅行をする」が「自尊心度・自己受容度（人格要素）」と「批判的な考え方と創造性（批判的思考要素）」に、「共同生活をする」が「批判的な考え方と創造性（批判的思考要素）」と「開放性と柔軟性（オープンネス要素）」に正の影響を与えることが明らかとなった。外国人との密接度合の高い行動である「旅行する」、「共同生活をする」の 2 項目で一部の異文化適応力への影響があることが示されたため、仮説 4b は支持された。

VI. 考察

1. パーソナリティについて

仮説 1 で検証されたように、外向性は「自尊心度・自己受容度（人格要素）」、「開放性と柔軟性（オープンネス要素）」に正の影響があるだけでなく、その他の異文化適応要素である「曖昧なことに対する忍耐度（感情規規制要素）」、「批判的な考え方と創造性（批判的思考要素）」において相関関係が確認された。また、重回帰分析においてもすべての異文化適応力要素との有意性が確認されており、他の独立変数と比較して影響力が大きいと、外向性が異文化適応力に及ぼす影響は非常に強いことがわかる。マツモト(1999)は「自尊心度・自己受容度（人格要素）」は他の異文化適応力に影響を与えるものであり、異文化適応力の基礎となるものであると述べている。外向性は「自尊心度・自己受容度（人格要素）」と強い相関関係が見られたため、その他の要素にも影響を与えていると考えられる。外向性が高ければ異文化においても積極的に異文化を持つ人と関わることができ、何か問題が起きたとしても前向きに解決することができるため、異文化における生活の上で外向性は必須要素といえることができる。

2. 派遣前の要因について

分析の枠組み図にあるように、派遣前の要素は「過去の海外経験」と「事前訓練」の 2 種類がある。

まず、「過去の海外経験」は「開放性と柔軟性（オープンネス要素）」と相関があったものの、他の要素との関係は一切なく、予想よりも異文化適応力への影響は小さかった。平田(2014)の人間関係に関する価値観の分類より、一般的に日本人は共同体主義で感情中立的であると言われており、個人よりも集団を重んじ、人間関係において感情を表出することが少ない。しかし、海外（特に欧米諸国）は、日本と全く逆の価値観であるため、日常のコミュニケーションで常に自分の考えを明示する必要がある。そのため、過去の海外経験が豊富な人は、自分自身の考えや価値観をさらけ出すこと、異なる考え方・価値観・意見を柔軟に受け入れることに慣れており、「開放性と柔軟性（オープンネス要素）」が高かったと考えられる。また、「帰国子女であるかどうか」は異文化適応力との関係が一切見られなかった。帰国子女は滞在

国の文化には精通しているだけであり、その他の国への適応力が高いわけではないためだと考えられる。一般的に帰国子女であれば海外で活躍できると考えられているが、異文化適応力の観点からすると帰国子女が必ずしも海外で活躍できるとは言えない。

次に、「事前研修」では、研修の有無と研修内容の両方で相関分析、重回帰分析で有意な結果を得ることはできなかった。しかし、多くの先行研究で事前研修の有意性が指摘されているため、異文化適応力の影響がないとは言い切れない。また、今回はある滞在における異文化適応度合いではなく、その人が持つ異文化適応力を測定したため、事前研修との間に関係性が見つからなかったと考えられる。

3. 滞在中の要因について

まず、「地域新奇性」では、相関分析、重回帰分析で有意な結果を得ることはできなかった。このような結果になった理由は、回答者の大多数が永井(1999)で日本との文化的乖離の小さいとされている北米に集中しており、文化的乖離の大きいとされる中南米やアフリカへの滞在者が極端に少なかったことが挙げられる。同様に、滞在中と一緒に過ごす時間の長かった友人に関しても、アジアや北米など日本と文化的乖離の小さい地域に回答が集中していた。また文化的乖離が大きい場合、その文化への適応は難しくなるが、それが必ずしも適応力を高めるわけではないことも考えられる。

次に、滞在中の行動では、「日本人・外国人との接触頻度」と「外国人の友人との行動」の両方で異文化適応力との関係性が確認された。「日本人・外国人との接触頻度」では、「外国人同居者数」と「日本人との連絡頻度」の2項目が異文化適応力に正の影響を与えていることが明らかとなった。つまり、外国人との接触頻度が多く、日本人との接触頻度が少ないほど、異文化適応力が高まると言える。日本人との接触頻度が多い場合、たとえ海外で生活をしていても日本で生活していることと変わらない状況であるため、異文化適応力は変化しないと考えられる。また、「外国人同居者数」と「日本人との連絡頻度」が影響を与えている異文化適応力の要素が異なることから、外国人との接触を増やし、日本人との接触頻度を抑える両方が必要であると言える。

「外国人の友人としたこと」では、「ボランティア活動に参加する」、「趣味の集まりに参加する」、「スポーツをする」、「旅行をする」、「共同生活をする」の5項目が異文化適応力に影響していることがわかった。特に「旅行をする」は「自尊心度・自己受容度（人格要素）」、「曖昧なことに対する忍耐度（感情規制要素）」、「批判的な考え方と創造性（批判的思考）」の3要素との相関関係があり、重回帰分析でも「自尊心度・自己受容度（人格要素）」と「批判的な考え方と創造性（批判的思考）」2要素との関係が明らかとなった。旅行では何度も行動の選択が求められ、その選択をする際に意見が対立した場合は話し合っ解決しなければならない。つまり、違う価値観を持った人とコミュニケーションをとり、意見が対立した際には話し合いによって意思決定をしなければならない。単に外国人と一緒に過ごすだけでなく、互いの文化の違いを克服する過程が異文化適応力へ影響していると考えられる。また、共同生活についても同様な過程が何度も繰り返されることから異文化適応力への影響が強かったと考えられる。

4. 自尊心度・自己受容度（人格要素）

「性別」、「外向性」、「日本人との連絡頻度」、「スポーツをする」、「旅行をする」の5項目で統計的に有意な結果が見られた。この要素は個人の性格や性別などの影響が強く、日本人と関わることなく海外で生活することや外国人と旅行するなどの経験を通して、異文化の中で生きていく自信を持つことができるため、自尊心度・自己受容度が高まると考えられる。特にスポーツや旅行では考えの違いから意見が対立する場面が多々あり、その葛藤の克服は自信を高める。したがって、この要素を高めるためには海

外で日本人が少ない状況で行動し、国難を克服する経験が効果的であると言える。

5. 曖昧なことに対する忍耐度（感情規制要素）

「性別」、「外向性」、「旅行をする」の3項目で統計的に有意な差が見られた。しかし、3項目のうち「旅行をする」のみ、重回帰分析では有意な結果を得ることができなかったため、この要素は性別やパーソナリティなどの個人特性が強く影響していることがわかる。この要素は感情をコントロールする力であるため、経験よりも本人が感情的であるかどうかを深く関わっているため、このような結果になったと考えられる。

6. 批判的な考え方と創造性（批判的思考要素）

「性別」、「外向性」、「外国人同居者数」、「旅行をする」、「共同生活をする」の5項目で統計的に有意な結果が得られた。この要素は共同生活や旅行など、外国人とコミュニケーションをとり、自分とは違う考え方・価値観に触れることによって高められると考えられる。同じ文化圏の人とのコミュニケーションでは共通の「常識」というものが存在するため意見の対立が少ないが、違う価値観を持つ人とのコミュニケーションでは意見が食い違うことが多く、お互いの妥協点を見つけるために物事を批判的に考える力が身につくのだろう。また異なる考えを知ることで、物事を多角的に考えることができる創造性も高めることができる。

7. 開放性と柔軟性（オープンネス要素）

「英語力」、「外向性」、「海外滞在の経験総数」、「海外生活の合計期間」、「海外生活比率」、「外国人同居者数」、「共同生活をする」の7項目で統計的に有意な差が見られた。この要素は、海外での経験が強く影響しており、海外における生活を重ねることで比較的容易に高めることのできる能力であると言える。海外の生活では、日常的に様々な現地の常識に直面する機会があり、それを柔軟に受け入れなければならない。また、大学や企業の職務において、自分の意見を主張する機会が多い。海外でこのような経験を積むことで「開放性と柔軟性」を高めることができる。

Ⅶ. インプリケーション

1. 研究面のインプリケーション

第一に、異文化適応の研究においてパーソナリティを考慮する必要性である。異文化適応に関しては言語能力やソーシャルスキルに着目した研究は多いが、個人のパーソナリティに着目した研究は少ない。本研究はパーソナリティの1つである外向性と異文化適応力の関連性を明確にし、パーソナリティが異文化適応力に与える影響の大きさを示した。今後の研究においては、パーソナリティと異文化適応力に焦点をあてた研究や外向性以外のパーソナリティとの関係性に着目した研究が必要となるだろう。また外向性の規定要因を明らかにし、外向性を高めるための施策を研究する必要性もある。

第二に、滞在中の行動に関する研究の重要性である。本研究では滞在中の対人行動と異文化適応力に関して調査し、滞在中の行動が異文化適応力の規定要因であることを示した。これまでの異文化適応に関するでは滞在中の具体的な行動に着目した研究は少なく、異文化適応力研究の新たな視点を与えたと言える。また本研究では、対人行動のすべてを網羅したわけではないことに加え、対人行動以外の行動については取り上げていないため、更に詳細な対人関係に関わる行動や対人以外の行動と異文化の関係性を説明する研究の必要性を示した。

2. 実務面のインプリケーション

第一に、企業が海外派遣者の選考時に外向性を考慮する必要性である。本研究では外向性がすべての異文化適応力と相関関係にあり、すべての項目の中で最も異文化適応力への影響が大きいことが示された。しかし、多くの日系企業では海外派遣者の選別の際、派遣者の職務遂行能力ばかりを考慮している。もちろん職務遂行能力は必須であるが、異文化への不適応は職務遂行の妨げになることがある。そこで、派遣者の異文化適応能力に着目し、その指標としてパーソナリティ（外向性）を考慮することを提案する。

第二に、現地の外国人・日本人との接触頻度を考慮することである。マツモト(1999)は、多くの日本人派遣者は現地の日本人同士だけで小さなコミュニティの中に固まってしまい、海外の「ミニ日本」の中で生活してしまうことで異文化に適応できない人々を問題視している。今回の研究で外国人同居者数と異文化適応力が正の相関、滞在中の日本人との連絡頻度と異文化適応力が負の相関があることが示されたことから、日本人派遣者同士ばかりが関わるのではなく、現地従業員との関わりを増やす企業側の取り組みも必要となるだろう。また単に接触頻度を増やすだけでなく、具体的にどのような行動をとるかも考慮する必要がある。旅行や共同生活などの外国人と密なコミュニケーションをとり、互いの意見を統合して意思決定をする行動がより異文化適応力への影響があることが明確となったため、現地社員との旅行を計画することや派遣者の住居を外国人と一緒にするなどの施策が海外派遣者の異文化適応力を高めるだろう。

3. 本研究の限界

本研究の限界点として、まず本研究で調査した滞在中の行動が限定的であったことが挙げられる。滞在中の行動に関する研究が少なかったことから、今回は筆者自身で選択肢を考えたため、行動の選択肢が不十分であった。実際の海外生活では様々な行動が含まれることに加え、今回異文化適応力に影響があるとされた行動である旅行や共同生活の中でも様々な行動が含まれる。より詳細に調べるために、様々な行動を網羅した研究が必要である。

また本研究に用いた ICAPS-26 は ICAPS-55 の主要 4 心理要素のみしか扱っていないため、異文化適応力のすべての要素を測定することができていない。この点においても結果が限定的であったと言わざるを得ない。ICAPS-55 を用いるか、また別の指標を用いた研究が必要だろう。

今後の研究においては、以上の 2 点を留意する必要がある。

参考文献

明石聡子(2007)「大学生の情動制御と精神健康の関連：情動制御尺度（国際適応尺度の下位尺度）の有効性について」『人間文化創成科学論業』 Vol.10, pp.309-317.

明石聡子(2008)「精神的健康性の関連要因としての情動制御とパーソナリティ：情動制御尺度（国際適応力尺度の下位尺度）の有効性についてⅡ」『人間文化創成科学論業』 Vol.11, pp.413-419.

Black, J. S., Gregersen, H. B., Mendenhall, M. and Stroh, L. K. (1999). *Global People through International Assignments*, Addison-Wesley Publishing Company, Ltd(白木三秀・永井裕久・梅澤隆 監訳『海外派遣とグローバルビジネス：異文化マネジメント戦力』白桃書房, 2001 年).

Black, J. S. and Mendenhall, M. (1990). "Cross-cultural training effectiveness: A review and theoretical Framework for future research", *Academy of Management Review*, Vol.15, No.1 pp.113-136.

Black, J. S., Mendenhall, M. and Oddou, G. (1991). "Toward a comprehensive model of international

首都大学東京 西村孝史ゼミ 2015 年度卒業論文

adjustment: integration of multiple theoretical perspective”, *Academy of Management Review*, Vol.16, No.2 pp.291-317.

花木亨・塩澤正(2007)「留学体験を成功に導く要素に関する解釈学的研究：アメリカで学ぶ日本人留学生の寮生活に関するケーススタディーから」『人文学部研究論集』Vol.17, pp.129-156.

樋口康彦(1997)「留学生のパーソナリティ特性が在日適応感に与える影響について：達成志向性・調和志向性の観点から」『実験社会心理学研究』Vol.37, No.2 pp.150-164.

平田譲二(2014)「既存研究からみた異文化適応能力」『産業能率大学紀要』Vol.34, No.2 pp.39-55.

マツモト・デーヴィット(1999)『日本人の国際適応力：新世紀を生き抜く四つの指針』本の友社.

茂住和世(2004)「異文化環境に適応する人材に求められる：日中合弁における社員研修の事例から」『東京情報大学研究論集』Vol.7, No.2 pp.93-104.

永井裕久(1999)「日本企業のグローバル化と海外派遣者の異文化適応」『慶應経営論集』Vol.17, No1 pp.121-133.

小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ピノ(2012)「日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)作成の試み」『パーソナリティ研究』Vol.21, No.1 pp.40-52.

孫 怡(2011)「異文化適応の過程におけるパーソナリティの変化：在日中国人留学生を対象に」『人間文化創成科学論叢』Vol.14 pp.265-271.

Trompenaars, F. and Charles H.T. (1997). *Riding the Waves of Culture Shock*, Nicholas Brealey Publishing (須貝栄訳『異文化の波：グローバル社会・多様性の理解』白桃書房, 2001 年).

高濱愛・田中共子(2009)「アメリカ留学準備のためのソーシャルスキル学習セッションの試み：対人関係の形成に焦点を当てて」『留学生教育』Vol.14, pp.31-37.

武内政幸・岡田龍司・平山聡子・マツモト デーヴィット(2004)「柔道の理想と現実の一考察—高校柔道選手と大学柔道選手の ICAPS の比較より—」『大東文化大学紀要』Vol.43, pp.67-80.

外務省(2014)「海外在留邦人数調査統計」

URL: <http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/> アクセス日: 2015 年 11 月 23 日.

文部科学省(2014)「トビタテ！留学 JAPAN」

URL: http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/tobitate/ アクセス日: 2015 年 12 月 10 日.

付表 分析に用いた変数の記述統計

記述統計量					
変数	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
性別	116	0	1	0.51	0.50
年齢	116	18	55	23.65	5.34
職業	116	0	1	0.69	0.47
英語力	116	1	5	3.24	0.87
外向性	116	1	7	4.84	1.33
渡航経験数	116	1	10	2.38	1.67
海外合計期間	116	0	84	14.91	18.67
海外生活比率	116	0	32	5.35	6.84
最長滞在期間	116	1	6	3.32	1.77
帰国子女	116	0	1	0.08	0.27
事前研修有無	116	0	1	0.34	0.47
語学	116	0	1	0.27	0.44
異文化コミュニケーション	116	0	1	0.22	0.41
文化	116	0	1	0.16	0.37
危機管理	116	0	1	0.23	0.42
ストレスマネジメント	116	0	1	0.05	0.22
滞在国内	116	0	3	1.36	0.70
友人出身地(1)	116	0	3	1.78	0.56
友人出身地(2)	116	0	3	1.67	0.66
友人出身地(3)	116	0	3	1.64	0.69
外国人連絡頻度	116	0	6	4.05	1.83
日本人連絡頻度	116	1	6	4.31	1.54
外国人同居者数	116	0	14	2.91	2.55
日本人同居者数	116	0	20	1.43	2.53
食事をする	116	0	1	0.94	0.24
飲酒をする	116	0	1	0.71	0.46
イベントに参加する	116	0	1	0.82	0.39
趣味の集まりに参加する	116	0	1	0.42	0.50
スポーツをする	116	0	1	0.53	0.50
ボランティアに参加する	116	0	1	0.22	0.42
旅行をする	116	0	1	0.41	0.50
共同生活をする	116	0	1	0.56	0.50
自尊心・自己受容	116	-25	13	-7.53	7.75
忍耐度	116	-13	10	-2.27	4.70
批判的思考力	116	-10	24	6.23	6.99
開放性・柔軟性	116	1	19	10.48	3.68